

留学後記

和歌山県立医科大学 長田圭司

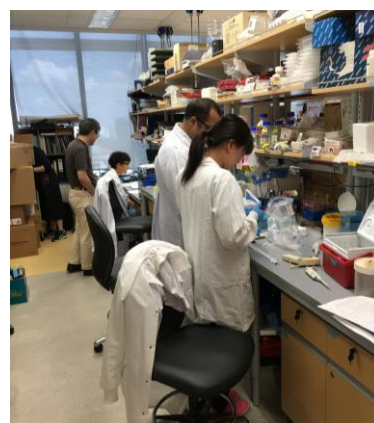
私が留学する機会を得た場所はシンガポールでした。私は脊椎外科を志し、脊椎の最小侵襲治療において日本最先端でいく、和歌山県立医科大学に3年目で入局しました。また脊椎分野で臨床、研究をするうちに、海外での脊椎治療について広く学びたいという気持ちを強く持つようになりました。

それまで医学留学というと大体の人はアメリカに留学しており、実際マーケットの広さ、人的資源、また研究に費やすお金の規模をみても、アメリカがトップであることは間違いないと思います。ただ、昔と比べてアメリカは制約が強くなっており、臨床留学をする際に患者さんの診察をみたり、手術を見学するのも難しくなっているようです。その点、ヨーロッパやアジアはまだ制約は強くないように思います。今回訪れたシンガポールは住むと言う点では制約は多かった（ビザの取得や家族を同伴すること）ですが、臨床に関しては患者さんの診療のお手伝いや手術の見学は比較的自由にさせて頂きました。脊椎の各チームをローテーションし、各主治医と共に診療に当たらせて頂くことが出来ました。

さて、シンガポールというと最近話題に上るように豪華なホテルであるマリーナベイサンズやマーライオンなどが有名ですが、その他金融、商業のアジアの中心地として栄えています。医学も同様で近年近隣諸外国より沢山の患者さんが集まります。シンガポールの強みは多言語に対応出来るマルチリンガルな医療体系にあると思います。医師の中にはシンガポールの大勢を占める中国系のほかマレー系、インド系、ヨーロッパ系の医師が混じり合っており、近隣諸国の患者さんの言語のほぼ全てに対応することが可能です。実際シンガポール大学の脊椎のトップの Wong 先生もマレー系で英語、中国語、マレー語すべての言語に精通されております。その強みを生かして、特に小児の側弯症の症例が沢山集まり、中には100度を超える側弯症にも対応しています。恐らく日本ではほとんど見ることがないような症例だと思います。その他脊椎カリエスや成人の脊柱変形症例、頸椎の変形症例など扱う疾患も多岐に渡ります。当然日本の方が進んでいると思う所もありますが、特にアジアではそのような日本では現在見ることが少ない症例も沢山経験出来たのが私にとっては非常に勉強になりました。また、他国よりの Fellowship の受け入れも盛んに行っており、私が知り合った脊椎 fellow 達も10人近くになります。そういった研修システムの構

築などを見ても、シンガポールの国際社会との上手な付き合い方が分かると思います。

今回海外に出て思ったことは日本の常識世界の非常識であることです。世界のスタンダードを理解することで、自分たちの強みや研究への取り組み方を再考する機会になりました。



NUS(シンガポール大学)の Labo には引き抜かれた日本人も沢山おり、巨額の国費で研究をすすめています。



NUH(シンガポール大学附属病院)では毎日整形外科 fellow 達に対する Morning teaching があり、活発に議論されます



私もチームの一員として、毎週木曜日に開かれる脊椎カンファレンスで症例検討のプレゼンをさせていただきました。



NUH の医局は 12 階にあり、見晴らしが抜群でした。



シンガポールでは諸外国より多数の難治性小児側弯症例が来ていました。



各国の fellow 達との交流は人生の財産となりました。